ナラティブ型コミュニケーションが 公共政策の政治心理に及ぼす影響に関する研究

○宮川愛由¹・川端祐一郎²・浅井健司（非会員）³・藤井聡⁴

(^{1,2,4} 京都大学大学院工学研究科・³ 栃木県庁)

キーワード：ナラティブ，政治心理，公共政策

A study on how narrative form of communication affects people's political psychology about public policies

Ayu MIYAKAWA, Yuichiro KAWABATA, Kenji ASAI, Satoshi FUJII

(^{1,2,4} Graduate School of Engineering, Kyoto University・³ Tochigi prefectural office)

Key Words: narrative, political psychology, public policy

目 的

人々の政治心理が公共政策の遂行過程に及ぼす影響は大きく、望ましい公共政策を選択し、実現することを企図した行政当局その他機関からの市民に対する情報発信やコミュニケーションは重要なテーマである。近年、コミュニケーション手法としての「ナラティブ」(narrative, 物語)の概念に対する注目が高まっており、その研究領域は心理学、医療、社会学、経営学等の多岐に渡り、その効果に関する実証的な知見や実践的な活用も進んでいる。しかし研究領域が多分野に渡るが故に理論的な統合が進んでおらず、言語情報としてのナラティブの形式的な特徴や他の言語情報との区別に関する定義は曖昧で、先行する実証研究においても、情報に「ナラティブ性」が加わったことの効果とその他の効果が明確に区別し切れていない。さらに、ナラティブ性の効果は個人がナラティブ型情報を志向する度合いに影響を受けると考えられるが、ナラティブへの志向性を直接的に尺度化した実証研究は見当たらない。

以上の問題点を踏まえ、本研究では、人々の政治心理の形成に対して「ナラティブ性」を持つ政策コミュニケーションが及ぼす影響に関し、政策シナリオの読解課題を通じて以下の2つの仮説を検証する実験を行った。

仮説1: 「ナラティブ型シナリオ」を用いることで、「非ナラティブ型シナリオ」を用いた場合よりもシナリオの読了効果（印象鮮明性や納得性、関心向上性、自我関与性）が高まる。

仮説2: 「ナラティブ型シナリオ」の効果は、個人のナラティブ型情報に対する志向の度合い（ナラティブ志向性）によって異なる。

方 法

シナリオの題材として、リニア中央新幹線の建設という公共交通政策を取り上げ、全国の男女240名を対象にWEB調査を行った。実験では、個人のナラティブ型情報処理に関する選好、資質、経験の程度を尺度化した「ナラティブ志向性」を測定した後、被験者をナラティブ性（時間性と主体の意図が明確）有り・無し2つのシナリオに振り分け、シナリオ読了効果を測定した(表1)。信頼性分析の結果、志向性のうちナラティブコンテンツ経験度は除外し、その他3つの尺度（いずれも $\alpha > .65$ ）を用いて分析を行った。

表1 測定指標

ナラティブ志向性	ナラティブ伝達能力【10問】	$\alpha=0.886$	情報や考えをナラティブ化して表現し伝達や説得をする能力・傾向
	ナラティブ感得能力【10問】	$\alpha=0.651$	状況や情報をナラティブ的に仕立て上げて理解する能力・傾向
	日常ナラティブ経験度【5問】	$\alpha=0.707$	日常生活の中でナラティブ型のコミュニケーションや情報に触れる機会が多い・好む
	ナラティブコンテンツ経験度【5問】	$\alpha=0.279$	ナラティブ型のコンテンツに触れる機会が多い・好む
読了効果	印象鮮明性【6問】	$\alpha=0.791$	シナリオを読んで感じた印象の鮮明さ
	納得性【6問】	$\alpha=0.718$	シナリオの内容に対する納得感
	関心向上性【6問】	$\alpha=0.900$	シナリオの内容に対する関心の向上度合い
	自我関与性【6問】	$\alpha=0.839$	シナリオの内容をどれだけ身近に感じられたか

結 果・考 察

仮説1について、「ナラティブ性の有無」の1要因分散分析を行った結果、いずれの読了効果に対しても主効果は有意ではなかった。仮説2について、「ナラティブ性の有無」、「ナラティブ志向性の高低(平均値で分類)」の2要因分散分析を行った結果、ナラティブ志向性（伝達能力・感得能力）による主効果が見られ、これはナラティブ志向性（伝達能力・感得能力）が高い人に対しては政策メッセージが「よりよく伝わる」ことを意味し、またこの結果は、ナラティブ志向性が高い個人が、ナラティブ性の希薄なシナリオであっても時間性や主体意図性の構築を自ら行っている可能性を示唆する。さらに、図1に示すように納得性、印象鮮明性、自我関与性に対して交互作用が見られたことから、ナラティブ志向性（経験度）が高い個人に対しては、ナラティブを用いた説明の方が「よく伝わる」と解釈でき、仮説2を支持するとともに、ナラティブ志向性が高い個人においてのみ、仮説1が支持された結果といえる。

図1 ナラティブ性とナラティブ志向性を要因とした二要因分散分析における交互作用